11月――木の葉の落ちる宇宙

教授　加　藤　丈　雄
（ドイツ文学）

今月（11 月）初旬に年長の知人の訃報を受け取った。その女性の息子さんがまだ小・中学生だったころ親しく交流していたが、最近はどうしておられるのだろうと思っていたところだった。今は医師になった愛息に看取られて彼女は静かに他界されたとのこと。

人の生死に日々直面している職業とはいえ、母という最も身近な存在を失う時、心の受ける傷が浅いなどということはないだろう。良き医療従事者なら、他者の心の痛みに共感する能力が精緻になりはしても、決して鈍麻しているわけではないはずだ。かつての自分ほどの取り乱しはないにしても、こんなとき彼にも何かしら慰めになるような言葉を贈りたいと思った。

秋　　リルケ　　（加藤丈雄訳）

木の葉が落ちてくる　どこか遠いところから
大空の彼方の庭という庭が枯れゆくかの様に
落ちてくる　否定の身ぶりとともに。

そして夜ごと　落ちてゆく　この重い地球も
全ての星から　孤独のただ中に。

私達は皆落ちてゆく。この手もまた落ちゆく。
ごらん　全てのものは落ちてゆく。

それでもやはり　一つの存在が　この落下を
無限に優しく　両手に支えてくれる。

Herbst　R. M. Rilke

Die Blätter fallen, fallen wie von weit,
als welkten in den Himmeln ferne Gärten;
sie fallen mit verneinender Gebärde.

Und in den Nächten fällt die schwere Erde
aus allen Sternen in die Einsamkeit.

Wir alle fallen. Diese Hand da fällt.
Und sieh dir andre an: es ist in allen.

Und doch ist Einer, welcher dieses Fallen
unendlich sanft in seinen Händen hält.

本当に辛いとき、人の言葉は正負いずれの側にも極端に作用する恐れがある。それが詩であれば、なおさらであろう。一語一語が研ぎ澄まされた詩語は、悲嘆で満たされた心に届かないどころか、逆なでしてしまうこともあるだろう。それ故、上記の詩は添付ファイ

ルにし、「その気分になられたときにでも」開いてもらうよう依頼した。

くも膜下出血による突然死であった我が母の場合とは違い、彼女は息子であり信頼できる医師でもある人物に見守られ「数ヶ月かけて、なだらかな弧を描くように自然に土に落ちていった印象」だったという。

安心して息子に我が身をゆだね(「否定の身ぶり」も見せず)「自然に土に落ちて」いく。――リルケの詩にもあるErde(地球)は、また大地そして土・土くれをも意味する(さらには「塵」も)。

詩を受けとめてくれた医師からは、私が「一つの存在」と訳しておいた箇所について質問を受けた。――「最後の Einer てなんなんでしょう」と。

大文字で表記されている以上、辞書的には「神」、それもキリスト教でいう唯一絶対の神を表すのであろうが、ここで私はあえてそのような表現を避けたかった。1902年の秋にこの詩を書いた時、作者リルケもEinerを一つの宗教に限定的な意味合いで用いたのではなかっただろう。

以下は私の返信である。

Einerについてきちんと語れるほどRilkeを専門的に読んでいませんが、おそらくキリストのような人格神というよりは、もっと大きな宇宙の創造を司る「存在」、汎神論的な意味合いの「神」ではないか、と個人的には思っています。

キリスト教を離れても、まさに僕らは宇宙の「塵(Erde)から生まれ、塵に帰る」存在と言えます。たまたま少しの時間、人間の形を取り、一生懸命それなりに生き、そして「塵/土/大地(Erde=地球)」に戻る。しかし、それは決して虚しいことではない。スピノザも言っているように私たちにも神(即ち宇宙)の一部が宿っていたし、これからも宇宙(つまり神)は存在し続けるのですから。

まあ、そんなふうに思っています。

急に寒くなりました。どうぞ、お元気で。

卑屈であれ尊大であれ、人が自己をどう規定しようとも、人間はこの宇宙という大きな存在の「一つの表れ(様態)」であることは紛れもない真理である。それが築いてきた沢山の事物や理念・言葉も、いま目の前にある樹木や雀たちと同様にまた宇宙の別の「表れ」の一形態であることにかわりはない。

全てを包括する宇宙を「神」と呼ぶのなら、私達もひとひらの木の葉と同じく、その神の一部であるし、これからもまたその一部としてあり続けると言えるだろう。――知人との「別離」に際して、そんなふうに思う自分がいる。